

いわゆる多重指定句における語順について

Eguchi Takumi
The Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1287027>

出版情報：英語英文学論叢. 59, pp.15-29, 2009. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

いわゆる多重指定句における語順について

江口 巧

1. 序

英語では、以下に示すように、いわゆる“多重指定”を含む表現が存在する。

- (1) John sent the book *to New York to Bill*. (Gruber (1976 : 85))
- (2) The ruler is *on the desk under the book*.

(1)では、本の送り先が“to New York”と“to Bill”という二つの着点句によって示されている。本来一ヶ所である本の送り先が、二つの句を用いて指定されていることから、このような現象を“多重指定”と呼ぶ。(2)でも同様に、ものさしのある位置が二つの場所句で定義されている。統語的には、多重指定では、関係する二つの句が間に介在する要素なしに直接結ばれることが多い。¹⁾ 一方、多重指定に関わる二つの句の意味に関して、Gruber (1976 : 82, 85) は、指定の詳細さ (specificity) の度合いは線的順序に沿って増す旨を述べている。つまり、(1)では、本の送り先が、まず「ニューヨークに」と漠然と述べられ、次に「ビルに」とより詳細に述べられている。この Gruber の見解から明らかなおり、多重指定に関わる複数の句の語順は、指定の詳細さの度合いに関して general から specific の順序で並んでいると一般化されている。

しかし、この一般化ではうまく説明できない多重指定の例も存在する。

- (3) It is *up in the bedroom*.

1) ちなみに(1)において、“to New York”と“to Bill”を等位接続詞“and”でつなぐと文法的に誤りとなる。詳細は Eguchi (2002) を参照。

この例では、“it”で示される事物の位置が、“up”と“in the bedroom”で指定されているが、この二つの句の意味的範疇がそれぞれ方向句、場所句と異なっているため、一概に general から specific の語順とは言い難いところがある。さらに以下の例を見てみよう。

(4) *It's just opposite the hotel, next to the Tourist Information Center.*

(Eguchi (2002 : 152))

この例は典型的な多重指定とは若干様相が異なるものの、二つの場所句はともに“it”で示される事物の位置を示しているため、Eguchi (2002) においては多重指定の下位範疇として分類された。このような例では、統語的には、二つの句の間にコンマが介在することが多い。そして、この例における二つの場所句は general から specific の順序で並んでいるというより、むしろその詳細さの度合いは同程度というべきである。

そこで本稿では、上に見た非典型的な多重指定の例を含め、多重指定に関わる複数の句の語順に関して、general から specific という定義を見直し、多重指定全般をより適切に説明する一般化を試みるものである。ここではまず、場所を特定する表現の提示を「道順の指示」に見たて、それを解釈する聞き手の認識内部では心的移動が行われていることを主張し、話し手が多重指定表現を提示する際には、聞き手の側の解釈をスムーズに行うために「参照点」という概念が重要な役割を果たすことが論じられる。

なお、この語順に関する考察において、以下のような状態変化動詞を含む「本体的な結果構文」(cf. 影山 (2001))に見られる多重指定の例は、考察の対象から除外するものとする。²⁾

(5) *The vase broke into pieces.*

2) 影山 (2001 : 165) は、この文の結果述語 “into pieces” は、「主動詞 (ここでは “break”) の固有の意味の一部として含意される変化状態を具体的に描写」していると述べている。よって、本稿でいう多重指定の現象であるとみなすことができる。

2. 非典型的な多重指定句——コンマの介在

次節以降において多重指定句の語順についての議論にはいる前に、前節で見た(4)のような非典型的な多重指定の例に関して、二つの句の間にコンマが介在する理由を先行研究でなされた議論をもとに簡潔に整理しておきたい。

まず既に触れたように、典型的な多重指定の表現では、二つの句は連続して生起し、間にコンマが介在することはない。

(6) John sent the book *to New York to Bill*.

(7) Tom is *out in the garden*.

影山 (1996: 221) は、多重指定では、関わる二つの句が表す領域に「部分－全体」の関係が成立すると述べている。(6)では Bill のいる場所へ到る経路と New York へ到る経路、(7)では庭の領域と屋外の領域との間にそれぞれ「部分－全体」の関係が成立している。先行研究で、多重指定に関わる複数の句の意味が、一般に general から specific へ進むとされるのもこのことと無関係ではない。一方、以下のような非典型的な多重指定の表現においては、「部分－全体」の関係が必ずしも成立しているとはいえ、これがコンマの介在を引き起こすひとつの要因となっている。

(8)=(4) It's *just opposite the hotel, next to the Tourist Information Center*.

(9) The restaurant is *not so far, only about one mile ahead*.

実は、「部分－全体」の関係の非成立とも関連するが、コンマの介在に関わるより重要な要因は、Eguchi (2002) で論じられたように、コンマ以下で後続する句が、問題の場所の規定において先行する句の追加的な役割を果たしているという点にある。つまり、後続する句は先行する句に after-thought 的に追加され、その結果、発話上、「間」が生じるというものである。話し手は、先行する句を提示した時点でいったん場所の指定を休止し、それから、聞き手の側の場所の特定をより確実に保障するために、後続する句を追加するという図式である。そしてこの類のコンマは、江口 (2004) で考察したように、二つの句がおのおのの独

立し、対等の立場で一つの場所の規定に貢献しているという理由で、等位接続詞“and”に匹敵する役割を担っていると考えられる。一方、上に見たコンマの介在しない(6)および(7)のような例では、二つの句は、問題の場所の規定にそれぞれが独立した形でなく、双方が相補的かつ同時に、いってみれば、二つの句で一つの仕事を“共同作業”的に行っているのである。

また、例えば(8)のような例においては、コンマの介在は、副次・派生的な働きではあるが、問題の場所を規定する際、解釈上のあいまいさを解消する働きをも担っている。仮に(8)において、二つの場所句の間にコンマがないとすると（同様にこれに相当する発話文で、間にポーズをおかずに連続して発話されたとすると）、“next to the Tourist Information Center”が先行する“the hotel”を直接修飾するという誤った解釈を誘発しかねない。コンマの存在によって、“next to the Tourist Information Center”が主語の事物の場所を特定するという正しい解釈が導かれるのである。

以上、本節では、非典型的な多重指定構文に見られるコンマの存在理由を概観した。

3. 多重指定句の語順を決定する要因

3.1. 聞き手の心的移動

本節以降では、多重指定句の語順を決定する要因を探っていく。

既に提示された非典型的な多重指定の例、および次のような例から明らかのように、多重指定が関わる複数の句が必ずしも general から specific の順序で並んでいるとはいえない例は多数存在する。

(10) *It's just after the bank, between the bank and the bus station.*

(11) *It's at the end of the street, across from the church.*

(*Listen for it, Oxford University Press*)

これらの例において、二つの句が記述する指定の詳細さの度合いは同程度であるといえる。そこで、語順を決定する別の要因を探ると、実は、先行する場所句の提示が鍵をにぎっていることがわかる。そのことを理解するために、二つの句の順序を入れ替えてみよう。

(12) ??It's *between the bank and the bus station, just after the bank.*

(13) ??It's *across from the church, at the end of the street.*

こうすると、双方ともに、聞き手にとっては問題の場所の特定がスムーズにいかなくなってしまう。先行する場所句の中に、発話直前の状況において、聞き手にとって容易に同定できない要素が含まれるからである。(12)では「バス停」、(13)では「教会」がそうである。これらは、発話直前の時点で、聞き手の視界に入っておらず、またその場所も知られていない可能性がある。このため、(12)、(13)では、先行句が提示された段階で、聞き手は「路頭に迷って」しまう。一方、後続する句に含まれる要素((12)では「銀行」、(13)では「通り」)は聞き手の視界に入っていると考えられるため、結局、聞き手は最終的に問題の事物の場所を特定するために、いま一度先行句に立ち戻って再解釈を試みるという厄介なプロセスをたどることになる。

このあたりの事情をよりよく理解する前提として、まず、聞き手が場所の記述を聞きとる際に、その認識内部で何が起きているのかを想定してみよう。事物のある場所というのは、通常、静的な性質をもっているとされ、位置を表す表現は、以下に示すように状態の描写であり、その意味構造は静的な性質をもつ述語 BE および AT で表示される。そこには事物の移動は一切関与しない。

(14) Tom is at the station.

[State BE [TOM [AT STATION]]]

これを以下の移動の表現と比較してみると、その違いは明白である。

(15) Tom went to the station.

[Event GO [TOM [TO STATION]]]

この意味構造は event の事象を表しており、ここでは述語に GO が現れることとあわせ、到達点は移動を含意する TO で表示される。これで明らかなおとおり、事物の位置を特定する表現には、事物の移動は一切関与しないとされる。しかし、その情報を処理する聞き手の認識内部では、

単にその位置を静的に理解するのではなく、心的な移動のプロセスが関わっていると考える。現在いる位置を *here* と指し示されるのでない限り、聞き手は、位置の記述の解読を行いながら、自身の認識内の地図上で提示される事物をたどりつつ、最終目的地に向かって移動していると考えられる。なおこれは、Matsumoto (1996)、松本 (1997)、Langacker (1987)、Talmy (1996) などで論じられた、以下のような特定の場所表現にのみ適用される「主観的移動 (subjective motion)」、「虚構的移動 (fictive motion)」の概念とは一致しない。³⁾

(16) There is a lake *through the forest*. (Matsumoto (1996 : 359))

(17) There is a chapel *across the river, through the meadow, and over the hill*. (松本 (1997 : 221))

彼らが意図する概念ではなく、ここで筆者が主張したいのは、彼らよりももっと広い意味で、すなわち位置表現全般において、それを理解する聞き手の認識内部では心的移動が関与しているということである。その証拠に、例えば上に挙げた(11)の位置表現は、その機能上、次のようないわゆる「道順の指示」の表現と等価である。

(18) Go straight toward the end of the street. Then you'll see it across from the church.

この文の聞き手は、指示を聞きながら、心的な地図の上で最終地点までの経路を順次たどることは疑いがないであろう。

3.2. 参照点

前節では、位置表現全般において、それを理解する聞き手の認識内部では心的な移動が関わっていることを主張し、その過程は道順の指示を

3) (16)は「森林を抜けたところに湖がある」、(17)は「川を渡り、野原を通して、丘を越えたところに教会がある」という意味である。Matsumotoらの主張によれば、これらの文は、“through”、“across”、“over”などの経路表現を含むことから、聞き手 (conceptualizer) が記述された経路を心的にたどるという意味で、主観的に喚起された移動を含むということである。

理解する聞き手の認識内部と並行する側面があることを示唆した。では、そのような道順の指示を出す場合、話し手の側からすれば、聞き手の側の最終目標地点への到達を確実にするためには、どのような点に配慮して指示を出せばよいであろうか。本節では、「参照点」という概念を導入してこの問いに対する答えを出していく。

「参照点」というのは認知言語学で用いられる概念で、Langacker (1993) によって提示されたものである。我々がある目標物 (target) を認知する際、直接その対象物にアクセスするのではなく、まず、別の事物を目印として選び出し、それを經由して目標物にアクセスすることがある。この際、この目印の働きをするものを「参照点」(reference point) と呼ぶ。例えば、北極星を探すのに、北斗七星を手がかりにその位置を探しあてることがあるが、この場合、北極星が目標物、そして北斗七星が参照点の働きをになうことになる。このような場合、参照点は認知しやすく、際立ったものでなければならない。我々が道順の指示を出す場合も同様のことがいえ、最終目標物の位置を指示する際、聞き手の同定を容易にするために、まず、聞き手にとって際立ったものを参照点として選び出す。そして、それを拠りどころとして、目標物への経路を提示するのである (もちろん、このプロセスが一回きりではなく、今度はいったん到達したその目標物を起点として、そこから同様のプロセスが繰り返されることもある)。

さて今、この参照点の概念を用いた考え方を多重指定を含む場所表現に適用すると、ある事物の場所を複数の句を用いて特定する際、その順序は、聞き手の理解を容易にするために、発話時点の状況において、聞き手にとって際立つ参照点を含む句を先行させた方が望ましいという結論が導ける。また、このことは裏を返せば、発話時点で際立っていない要素を含む句は先行させてはならないということになる。では、多重指定表現の場合、聞き手にとって際立つ参照点とは具体的にどのようなものがあるのか、次節でこの点を考察していくことにする。

3.3. 参照点 — ケーススタディ

まず、発話の状況で最も際立つ参照点になりうるものとしては、いうまでもなく、話し手および聞き手が現在いる場所が挙げられる。以下がそのような多重指定の例である。

- (19) It's *about 3 miles ahead on the right*.
 (20) It's *just across the street, next to the post office*.
 (21) She is *downstairs in the kitchen*.

(19)において先行する“about 3 miles ahead”という句は、現在いる位置を基点としてそこからの距離を示した表現である。(20)の“just across the street”は、やはり現在地からみて「ちょうど道路を渡った場所」という指定を行っている。一方、「郵便局」の存在およびその位置は聞き手には知られていない可能性がある。(21)において、先行する“downstairs”は、やはり(話し手、もしくは聞き手、もしくはその両者のいる)現在の位置を基準として、それより「階下」といつている。この文では、おそらく聞き手は「台所」の位置を知っている可能性がかなり高いが、それでも現在地が参照点となった表現が先行していることに注意したい。これらの例において、二つの句の順序を入れ替えると不自然な文となることは以下に示すとおりである。

- (22) ?It's *on the right, about 3 miles ahead*.
 (23) ??It's *next to the post office, just across the street*.
 (24) *She is *in the kitchen downstairs*.⁴⁾

次に、参照点として、話し手および聞き手が存在する現在の場所ではなく、時間軸上における現在の時点が基点となることもある。

- (25) as we mentioned *earlier in chapter 2, ...*
 (26) *back in ancient times, ...*

上の例はいずれも現在の時点を基準にして、(25)ではそれよりも以前の時(earlier)、(26)では過去時への方向(back)に言及した表現が先行している。順序を入れ替えた形式はやはり容認されない。

4) この文の*のマークは、多重指定の解釈での非容認性を示している。この文自体容認はされるものの、“downstairs”は“in the kitchen”を直接修飾する解釈となり、もはや多重指定の文ではない。その結果、この文は、この家には二つの異なる階に台所が存在するという読みの可能性も出てくる。

(27) *as we mentioned in chapter 2 earlier, ...

(28) *in ancient times back, ...

その他のケースとして、現在のおかれた状況から容易に特定できるものが参照点として機能することがある。まず、現在いる位置から見て、話し手もしくは聞き手の視界に入っているものが挙げられる。

(29)=(4) It's just opposite the hotel, next to the Tourist Information Center.

(30)=(11) It's at the end of the street, across from the church.

(29)において、「ホテル」は話し手および聞き手から見えていると考えられる。一方、「観光案内所」は聞き手の視界にはいっておらず、またその位置も知られていない可能性がある。このような場合、後者から先に提示するのは不可能ではないにしても、聞き手の解釈に余計な負担をかける。

(31) ?It's next to the Tourist Information Center, just opposite the hotel.

同様に、(30)においても、「通り」は目の前にあると考えるのがごく自然であり、一方、「教会」は通りの突き当たり付近にあって、現在位置からは見えないと考えられる。語順の逆転がかなり不自然な文を生み出すのは、既に(13)で見たとおりである。

ここで興味深いのは、同じ“across”という経路表現が使われながら、多重指定の構文で現れる位置が異なる(20)と(30)である。再度ここに例を挙げて説明する。

(20) It's just across the street, next to the post office.

(30) It's at the end of the street, across from the church.

二つの例で“across”を用いた経路表現は、片や先行し、片や後続している。つまり、多重指定においてこの句の位置を決定するのは、この句の語彙的意味ではないことは明らかである。それを決定するのは、その経路句に（明示的あるいは暗示的に）示された事物が発話時点で参照点

となりうるかどうかという点である。(20)の“just across the street”のみが、現在いる場所を基点としているので参照点となりえ、それゆえ多重指定において先行しているのである。

現在のおかれた状況から容易に特定できるために参照点として機能するものとして、今まで見てきたような物理的・知覚的に触知できるものばかりでなく、文脈上際立っている要素もその範疇に入ってくる。以下にそのような例を三例挙げる。

(32) In a formal letter written on paper you would normally place your address *at the start of the letter before the main part of your message.* (A Passage to English, 九州大学出版会)

(33) I like the same flight *one day earlier on May 22.*

(Dialog Dictation Exercises, 鶴見書店)

(34) Teresa Amshoff heard the story and suggested that the church parking lot *adjoining her house, only a mile from the Schmitts,* would make a perfect helicopter landing pad.

(Susan G. Fey, *Snowed in*)

(32)では、改まった手紙では住所をどこに書くかということが具体的テーマになっているが、“in a formal letter written on paper”が話題化され先行していることから、この時点で読み手の意識の中では「手紙」が際立っていると見え、そのため、これを含む場所表現が先行したと考えられる。⁵⁾ (33)は、客が航空機の予約を変更し、出発日を当初の予定より一日早めるという内容である。聞き手の航空会社職員の意識の中には、当初の予定である5月23日という日付が際立っていると考えられるため、これを参照点とした“one day earlier”を先行させる語順を選択している。この語順を逆転させるとやはり不自然な文となる。

5) この文の二つの場所句の語順を決定するものが“at the start of”あるいは“before”でなく、“the letter”であることは、次の用例を見れば明らかであろう。

i) In a letter, closing phrases of address such as “Sincerely yours” or “Best wishes” appear *at the end of the letter, after the main part of your message.*

この例においても、本文(32)と同様に、読み手の意識の中で際立っていると思われる“the letter”を含む句が先行している。

(35) ?I'd like the same flight *on May 22, one day earlier*.

(34)は、肝臓移植を必要としている Schmitt 家の孫のもとにドナーが見つかったという朗報が入るが、周囲が雪に埋もれた絶望的な状況の中、市民の協力により、無事子供を限られた時間内に遠くの病院まで運び届けるという内容の小説に現れた文である。Schmitt 家の家の近くへヘリコプターが着陸できる場所を確保する必要があるが、この知らせを聞いた一市民の Teresa Amshoff という女性が、自分の家に隣接し、しかも Schmitt 家からはわずか1マイルしか離れていない教会の駐車場がヘリコプターの着陸地となりうることを提案するという文である。この文で、教会の駐車場の位置を示す二つの場所句のうち、先行する句に代名詞“her”が現れていることが示唆的である。代名詞の使用は、その指示物が文脈上際立っていることを要求する (cf. Ariel (1990), Gundel, Hedberg and Zacharski (1993)) ため、この文が提示された文脈では、Teresa Amshoff という人物が際立ちをもっていることが容易に推測される。そこで、書き手はまず、教会の駐車場がこの人物の家に隣接していることを示し、そしてさらに、この駐車場が Schmitt 家からも遠くはないという情報を追加的に提示することで、聞き手の側の教会駐車場の場所の理解がなめらかに進むと同時に、この場所の好都合さが効果的に伝えられるのである。もし、代名詞“her”を含む文を後続させると、以下に示すように、間に“the Schmitts”が介在することで、Teresa Amshoff の際立ちが遮断され、また同時に代名詞“her”の指示対象の解釈があいまいになるという危険性をもはらむことになる。

(36) ??...the church parking lot *only a mile from the Schmitts, adjoining her house*, would make a perfect helicopter landing pad.

以上、本節では、話し手もしくは書き手が多重指定の句を用いて、事物の位置あるいは出来事の発生時点などを示す場合、聞き手もしくは読み手にとって際立ちをもったものが参照点として選ばれ、それを含む句が先行して提示されることを、参照点のさまざまなタイプの事例を挙げながら論じてきた。

3. 4. 方向句の先行

これまで論じてきたような見方をとると、例えば方向句と場所句からなる多重指定表現において、一般に方向句が先行することが自然に説明される。

(37) He is *up on the roof*.

(38) She is *out in the garden*.

これらの例で、「屋根」や「庭」の場所は聞き手には既に知られていることが推測されるが、それでも、方向句を先行して添えることで、聞き手は、認識内部で、現在自分がいる地点から問題の場所に達するまでの経路において、初期段階の移動がスムーズに誘導されることになる。このことは、次のような、三重の多重指定表現をみるとさらに興味深い。

(39) *It's up here in the bedroom*.

ここでは、問題の事物の位置が“up”、“here”、“in the bedroom”という三つの句によって指定されている。この文は、聞き手が一階の例えばリビングルームに、話し手が二階の寝室にいる状態で、ヘアブラシの場所を尋ねる聞き手の問いに対して返答されたものである。この状況では“*It's here in the bedroom*”という二重指定表現でも事足りるのであるが、聞き手にしてみれば、現在の位置から階上の方向を示す“up”を最初に提示されることで、認識内部における心的移動が支障なく行われることになる。ここで、“up”と“here”を逆転させると非文となる。

(40) **It's here up in the bedroom*.

これは、“up”という方向句の参照点が常に現在位置である、つまり、現在いる位置を基点としてそこからの方向を表したものであるのに対し、“here”は、聞き手にとって話し手のいる場所がわからなければ機能し得ない位置表現だからである。その証拠に、次のような対話が起こりうる。

(4) X : Where are you, Mom?

Y : I'm here, John.

X : Where? Tell me exactly where you are.

対話の多くの場合、聞き手は目の前に見えているか、もしくは声の聞こえてくる方向からその場所が特定できるので、“here”は有効な場所の誘導表現として機能するが、上の例のように、それが必ずしも成功しないケースも起こりうる。したがって、“here”に先行して、現在位置を基点とする方向句を提示することで、聞き手の側の心的移動が支障なくよりスムーズに進行することになる。以上のことから、聞き手にとって、現在位置という最も際立った参照点をもつ“up”の方が、問題の場所への直接的なアクセスが保証されない“here”よりも先行して生じることになるのである。

4. 結び

本稿では、複数の句があるひとつの場所・時点などの指定を行う多重指定表現において、その生起順序を決定する要因を探ってきた。まず、複数の句が連続して生起する典型的な多重指定表現とは異なり、間にコンマが介在する非典型的な多重指定表現では、それぞれの句の指定の詳細度が同程度であることが多く、従来から言われてきた general から specific へとする一般化ではうまく説明できないことを指摘した。そして、場所表現等の意味構造は、たとえ静的な状態を表すものであっても、それを理解する聞き手の認識内部では一律に心的移動が起こっていると論じた。そして、例えば道順の指示の提示において、聞き手の側の目標物へのアクセスを容易にするため、基点として機能する参照点という概念が重要な役割を果たすことに着目し、それと同様に、場所表現等においても、まず聞き手にとって際立ちをもつ要素が参照点として選び出され、それを拠りどころにして以降の心的移動が進むことから、聞き手の中で際立った参照点を含む表現が先行して提示されると論じた。この場合、発話開始時点で相対的に際立ちの低い事物は参照点になりやすく、このような事物を含む場所表現は後続する位置におかれやすいことをみた。このような語順をとることにより、聞き手の側での心的移動は、目標地点に向かって初期段階からスムーズに進むことになる。なお、発話

開始時の参照点として機能するものとして、話し手・聞き手が現在いる場所・時点、発話時点で視界にあるもの、および談話上際立っているものなどが挙げられることをみた。最後に、以上のような見方をとることにより、一般に話し手・聞き手のいる場所を参照点とした方向句が場所句に先行して現れるという言語事実が自然に説明されることを論じた。

以上、本稿の主旨は、多重指定表現の語順において、従来とられてきた general から specific という見解に取ってかわるものとして、聞き手にとって際立つ参照点の提示が重要な鍵を握っていることを主張するものであるが、しかし、多重指定の用例によっては、general から specific という一般化が依然として有効と思われる例も存在する。例えば、以下のような例である。

(42) *It's quite far, about ten miles ahead.*

本稿の議論からすると、“far”も“ten miles ahead”もいずれも現在いる地点を参照点とした表現である。したがって、その語順はどちらを先行させてもよいはずであるが、どちらかと(42)のように“far”を先行させる方が自然である。この事実を説明しようとする、前半部分で漠然と「遠い」と述べ、後半で具体的な距離を提示しているという言い方に頼らざるをえない。したがって、用例によっては、本稿で主張された論点に加え、従来の general から specific という一般化を加味した説明が必要になってくることも認めざるをえない。しかし、再度確認しておきたいのは、本稿で提示された例の多くが、従来の general から specific という定義ではうまく説明できないことである。したがって、多重指定表現における複数の句の語順に関して、より包括的で、事実を正しく捉えた一般化としては、本稿で提示された参照点という概念にもとづく分析が妥当であるところでは主張するものである。

参 照 文 献

- Ariel, Mira (1990) *Accessing Noun-Phrase Antecedents*, Reutledge, London.
 Eguchi, Takumi (2002) “Coordination of Path Phrases in English,”
English Linguistics 19-2, 142-160, English Linguistic Society of

Japan.

- 江口巧 (2004) 「多重指定と等位接続をめぐって」『言葉のからくり』河上誓作教授退官記念論文集, 273-285, 英宝社, 東京.
- Gruber, Jeffrey (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland, Amsterdam.
- Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg and Ron Zacharski (1993) “Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse,” *Language* 69, 274-307.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2001) 「結果構文」『動詞の意味と構文』影山太郎編, 154-181, 大修館書店, 東京.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1: *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (1993) “Reference-Point Constructions,” *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Matsumoto, Yo (1996) “How Abstract is Subjective Motion? - A Comparison of Coverage Path Expressions and Access Path Expressions,” *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adel E. Goldberg, 359-373. CSLI Publications, Stanford.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」『空間と移動の表現』中右実編, 125-230, 研究社出版, 東京.
- Talmy, Leonard (1996) “Fictive Motion in Language and ‘Ception,” *Language and Space*, eds. by Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel and Merrill F. Garrett, 211-276, MIT Press, Cambridge, MA.